

## 『陶淵明考』 (其二) 「酒」 東と西 : 漢詩の英訳 (4)

メタデータ	言語: ja 出版者: 浜松医科大学 公開日: 2013-08-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 櫻井, 信夫, 大木, 俊夫, Kelley, David B., 呂, 泉生 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10271/202">http://hdl.handle.net/10271/202</a>

## 『陶淵明考』(其二)「酒」東と西:漢詩の英訳(4)

櫻井信夫<sup>\*</sup>・大木俊夫<sup>\*\*</sup>・David B. Kelley<sup>\*\*</sup>・呂 泉生<sup>\*\*\*</sup>

(<sup>\*</sup>名誉教授・<sup>\*\*</sup>英語・<sup>\*\*\*</sup>実践家政専科学校音楽科前主任教授,台北,台湾,中華民國)

### Contemplation on Tao Yuan-ming (Part Two):

### The Goblet and Wine-jar

### East and West : An Experiment in Poetic Translation (4)

Nobuo SAKURAI, Toshio OHKI, David B. KELLEY and Lu Chyuan-SHENG<sup>\*</sup>  
*Professor emeritus; English; Professor emeritus, Department of Music*  
*Shih-chien College of Home Economics, Taipei, Taiwan, R.O.C.*

**Abstract :** When an old man faces the unexpected death of his wife, whom he has entirely depended on throughout his life, he is at a loss as to what to do. This is a familiar situation and increasingly a problem in present-day Japan. An old poet, Tao Yuan-ming, who was an outcast, and who drank alcohol in order to escape from reality, at last, realized the importance of his wife's love, thoughtfulness and encouragement to him. He came to be despised even by his less sophisticated neighbors. His problem with alcohol is truly heartbreaking to see at the end of the life of this great poet, whose poetry is analyzed in this paper. English translations are also presented and discussed.

### はじめに

筆者らは前篇の「陶淵明考」(其一)において、淵明の詩賦を検討、英訳した<sup>1)</sup>。淵明が生きた東晋時代の中で置かれていた環境と、晩年に起きた東晋から宋への王朝の交替が実際には彼の曾つての華人同僚劉裕による篡奪であったこと等を考え併せると、猛志を懐いて飛躍しようとした若き日の夢の挫折を痛感する淵明の嘆きを見出し得たように思われる。挫折の原因は、主に彼が夷民族として蔑視されたことに拠るものであろうが、彼の性格的な弱気をも考慮する必要がある。すると、これまで酒を愛した田園詩人、隱遁者とされた淵明とは違った人物像が浮かび上がる。

第二篇「漢武帝の愛」で、戦中北京公使であった遠藤秀造教授に友人佐久間氏が「シナ人は嘘を書くが、詩だけは心を語っている」と言った言葉を引用した<sup>2)</sup>。淵明は詩文の中で一事を除いては彼の心を率直に語った。しかし、華人(漢族)から彼の属する溪族が蛮夷、賤民と蔑視された屈辱感については書き残さなかった。自尊心からであろう。

## 第一章 愛と望郷

前篇で、「閑情賦」と「帰去来兮辭」とを中心に「愛」と「望郷」とを主題とした。

筆者は常に人間の悲哀、歓喜の情は古今東西を通じ変わらないと信じている。他方、必ずしもそうではないと云う批判も得ている。大史家司馬遷は「報任少卿書」<sup>3)</sup>の中で、武帝から誤った刑罰により汚辱に満ちた去勢を受けた後、心血をそそいで著作している百三十篇の大著「史記」の目的は「欲以究天人之際、通古今之變、成一家之言」と言い、時代による生活の変遷の中に共通するものを見出すことを欲すると言っている。吉川幸次郎教授は「私も時代により物質的環境は変化しても、人間の哀歎の姿は古往今来同じであるという見方に、おもむきがちである」と述べ、一般の歴史家から其の点を批判されていると記した<sup>4-2)</sup>。此の偉大な中国文学史家にしてかくの如くで、筆者のような非専門家が批判を受けて当然であろう。ギリシャのツキジデス(Thucydides: 460?-400? B.C.)は彼の「戦史」の中で、「今後展開する歴史も、人間性の導く処、再び過去の事件と相似た過程を辿るであろうから...私の歴史に価値を認めてくれれば充分である」(1.22)と、また「内乱を契機に、諸都市の種々の過去の事件、数知れぬ災厄のような実例は、人間の性情が変わらない限り...未来の歴史にも繰り返されるだろう」(3.82)と、時代を越えて変わらない「人間の本性」を記載し、洋の東西と時代とを隔てても、司馬遷と同じ意見を述べている<sup>5)</sup>。

### 愛

古代シナにおいて人々に歌い継がれた詩歌の中から孔子が305篇を選び、詩経と呼び人間の道を示した、と伝えられた<sup>6)</sup>。其の多くは人々の感情を其の儘に言い表わし、婦人や男女の愛を歌ったものも少なくない。しかし、所謂儒教的思想が普及するにつれ、君子士大夫の使命が次第に格式化され、唐以前には、詩は心に秘めた志(使命感)を言葉として発するもの(詩者志之所之也)<sup>7)</sup>であり、言行は君子の天地を動かす所以のもので、慎まなければいけない(言行君子之所以動天地也可不慎乎)<sup>8)</sup>。其れゆえ、士大夫の詩は経世の大志を述べ、男女の「愛」などを詠むべきでないと謂う。淵明は、子供達への「愛」を大らかに詠んだが、最初の妻は彼が三十歳の時に死んだと述べ、其の名は残していない。

梁の太子蕭統が「陶淵明伝」<sup>9)</sup>の中で、「其の妻も能く勤苦に安(やす)んじ、彼と志を同じうした」と称賛した後妻の翟(てき)氏について、彼は詩の中で子供達と山遊びに行こうと彼女を誘ったが、妻がどのように勤苦を共にしたかは、「癸卯(みづのと)の歳、始春、田舎に懐古す：其二」(39歳)で、「春の農作業は...気持ちを弾ませてくれる...日が暮れると連れ立って帰り、酒壺をひっさげて隣人をねぎらう。それから歌を口ずさみながら柴の戸を開める。まずは私も百姓暮らしが地についたようだ(英訳略)」と農作業を楽しんでいる様子を伝え、「誰」と「日入りて相与(あいと)に帰った」のか当時の風潮の中で明かにしていないが、彼女への感謝と愛とを歌う彼の幸せが伝わってくる<sup>10)</sup>。此の詩以外にも、耦耕(二人並

んで耕す)こそ私が心惹かれる生活であると意味深い表現を「還江陵夜行塗口」(37歳)に見出だす。「二人で」とは、妻を指すのか、どうか不明であるが、時期的に見て妻翟(てき)氏と考えるべきである(後述)。彼は翟氏の死亡時期についても書き残してはいない。

唐代には士大夫も男女の愛を詠んだ。元稹(779-831 A.D.)は元和4年(809)2月30歳になって、やっとエリート・コースの入口である検察担当の監察御史(正八品上)に昇進した<sup>13)</sup>。其の喜びも束の間、其の年の7月、苦勞を共にした妻韋叢が27歳で一女を残して死んでしまった。彼は妻の死を嘆き、数十編の「悼亡詩」を作った<sup>14)</sup>。「遣悲懷三首：其二」は、貧しかった日々の苦勞を分かち合った妻と昔笑って話した事が突然我が身に起り、何も彼も思い出ばかりが残って、それぞれの人が此の哀しみから逃れられないことは知っていても、どれを見ても哀しみは果てしないと、残された者の恨みを切々と詠んでいる。

遣悲懷 元稹 昔日戲言身後意 今朝皆到眼前來 衣裳已施行看盡 針線猶存未忍開 尚想舊情憐婢僕 也曾因夢送錢財* 誠知此恨人人有 貧賤夫妻百事哀	Elegy Yuan Zhen (779-831) In the old days, we joked about the afterlife, This morning, all of our jokes have come to pass. Your clothes have nearly all been given away; Your embroidered clothing is still here, but I dare not unfold it. I still remember your generosity to our maids and servants; After you came into my dreams, I burnt paper money in your memory. Now, I truly know the regret everyone has; Those who have shared poverty together, are tortured by hundreds of memories.
---	---

\*：夢の後で(道教の)廟に行き貴女の為に紙銭を焚いて、あの世での幸せを祈った。

此の詩は、人間の本性が何時でも何処でも共通するものを秘めているのを痛感させる。淵明は詩賦の中で妻への愛と感謝とにほのかにしか表現を許されなかったとは言っても、彼女の死後、「妻恋いの歌」を歌わずにいられなかったのも、独り後に取り残された寂しさと心に秘めた強い愛の発露を抑えることが出来なかったのであつたらう。

## 望 郷

前篇の「愛」と「望郷」とは、本篇「酒」、次篇「死」と共に、陶淵明を理解する上で重要な主題であった。旅先で望郷の思いを述懐した淵明の詩から、早くから隱遁を望んで居たとするのは必ずしも当を得た推論とは考え難い。例えば、「庚子歲五月中從都還阻風於規林二首」(36歳)、「辛丑歲七月赴假還江陵夜行塗口」(37歳)などは、必ずしも官を辞め、家に帰るものではなかった。「ふるさと」とは、忘れえぬ思い出が留まり心の安らぎを覚える土地、喜びも悲しみも純化されて心の中に存在する土地である。其れゆえに人は、直ぐにでも帰郷する日を夢見ることによって自分自身を励ますのである。

淵明は溪族、賤民と見下され、心が萎えた時に望郷の詩を作ったのであろう。其等の詩は、結局、妻を恋うる詩でもあったと言えよう。既に触れたように、耜耕(二人並んで耕す)こそ私が心惹かれる生活であるという非常に意味深い表現は、彼女が傍に居るだけで心が安らいだ事を意味したのであろう。夫婦の愛とは、そうしたものではなからうか。

下記の2首の詩は、隆安4年(400)36歳、荊州刺史桓玄に仕えていた時の作である。

庚子歳五月中従都還 Dropping Anchor on a Wind-whipped Lake: Two Poems

阻風於規林二首：

其 一

No.1

行行循婦路 Swiftly, I continue my homeward journey,  
計日望舊居 Counting the days before my return to the old residence.  
一欣待温顔 My first joy is to see my mother's smile;  
再喜見友于 The second is to cheerfully meet my brothers.  
鼓棹路崎曲 Punting my boat along the irregular shoreline,  
指景限西隅 The sun sinks below the western horizon.  
江山豈不險 The way across rivers and mountains is not always easy;  
歸子念前途 The traveller hurrying home is anxious about what is ahead.

凱風負我心 A tempest drives me along against my wishes.  
戢棹守舊湖 We drop oars in a sheltered cove.  
高莽眇無界 The grass grows high and abundantly,  
夏木獨森疎 While summer trees sway with thick foliage.  
誰言客舟遠 Who can say the boat is still far from home?  
近瞻百里余 Or, that it is no more than a hundred *Li*.  
延目識南嶺 I can see familiar Mount Lushan;  
空歎將焉如 Yet, I heave a sigh, wondering where this boat is sailing.

其 二

No.2

自古歎行役 From ancient times, man has suffered on his journey,  
我今始知之 Now I am beginning to understand that.  
山川一何曠 How vast the mountains and rivers are!  
巽坎難與期 Yet, the weather, fine or foul, is unpredictable.

崩浪聒天響 The dash of the waves clamours against the sky,

長風無息時 And the tempest drives us along incessantly.  
久游戀所生 An exile longs for mother and home,  
如何淹在茲 Why should I continue to stay here under such conditions?

静念園林好 Quietly recalling my gardens and groves,  
人間良可辭 Why not stay aloof from earthly affairs?  
当年詎有幾 How few years I have!  
縱心復何疑 So, why can't my heart be free, again?

第二首の終4句で故郷の園林を思い浮べ、こんな嫌な俗世間（官吏の生活）と縁を切ると詠んでいるのに、翌年の「還江陵夜行塗口」でも、嫌悪しつつ官吏の生活を続けている。彼の此の大きな矛盾は必ず後悔を伴うものとなるのであった。

辛丑歳七月赴假 My Return to Office Work at Jiang-Ling Late one Night  
還江陵夜行塗口

閑居三十載 For thirty years I have stayed at home;  
遂與塵事冥 My life was not concerned with earthly matters.  
詩書敦宿好 Reciting from books of poetry has been my avocation;  
林園無世常 My pastoral life has kept me out of common affairs.  
如何舍此去 Why ever did I leave such quiet surroundings  
遙遙至西荊 And go all the way to the west, to Jiang-ling?

叩棹新秋月 We struck oars under the moonlight in early autumn,  
臨流別友生 At the waterside, I bid farewell to my friends.  
涼風起將夕 A cool evening breeze blew just then;  
夜景湛虛明 The night scene set in dull brightness.  
昭昭天宇闊 The moon casts its beams widely through the heavens;  
島島川上平 The smooth waters shimmer in silver.  
懷役不遑寐 Thinking of official business, I can not sleep;  
中宵尚孤征 At midnight, a traveller is alone in a boat.

商歌非吾事 I have no concern for making a name for myself,  
依依在耜耕 My heart still clings to ploughing my fields side by side.  
投冠旋舊墟 I should resign and return to my old home;  
不為好爵榮 Earthly honours and wealth no longer delude me.

養真衡茅下 I can sustain my true character under my thatched roof,  
 庶以善自名 And hope to keep my honour.

こんなにまで官吏の生活を嫌悪し、(妻と)二人で農耕生活に入ることを望んでいながら、何故辞任しないのであろうか。单身赴任の淵明は溪族、賤民と見下され心が萎えた時に隠遁ではなく、側に居て呉れると心の安らぐ妻を恋うる詩を詠んだのであろう。妻の日常を想像し、或いは妻の名をそっと呼ぶことは彼に心の安静を齎らしたかもしれない。

帰るべき故郷を失った老人でも、別れた日の儘に美しい母親との再会を、故郷の山河を、夢想するのである。望郷に籠めた希望は、他郷に居る者を力付ける。第二篇で、漢代、唐代に消耗品として強制徴兵された子弟兵の嘆きを、杜甫の「兵車行」に見た。

共著者呂の「五月康乃馨」(五月のカーネーション)と云う歌曲は、呂が病気で入院中、拉致され台湾に連れて来られた老子弟兵が、五月第二日曜の母の日に、大陸の故郷で自分を待っている母に会いに行くのだと、叶わぬ望郷の思いだけが彼を支えているのを見て作った。当時の戒厳令下の台湾で子弟兵の「嘆き歌」を作ることは反政府活動と見做されるため、孤児院育ちの棄て児であり、志を立てて出郷した老人が、母よ生きていて下さい、捜しに行くから待っていて下さいと、「母を恋うる歌」としたのであった。

五月康乃馨

Andantino

五月第二日曜の母の日、大陸の故郷で自分を待っている母に会いに行くのだと、叶わぬ望郷の思いだけが彼を支えているのを見て作った。

五月康乃馨 呂泉生

人家說我是棄嬰 被拾寄住孤兒院 保姆們對我很好 可是不是我母親  
五月第二禮拜天 到處母子把手牽 紅紅白白康乃馨 個個都別在胸前  
康乃馨 康乃馨 是紅是白都不要 只祈母親還健在 只祈母親還健在

(Chinese pronunciation)

Wúyuè kāngnǎixīn

rénjiā shuō wǒ shì qìyīng bèishí jīzhù gū'éryuàn bǎomǔmen duì wǒ hěnhǎo kě·shì búshì  
wǒ mǔ·qīn wúyuè dì èr lǐbàitiān dào chù mǔzǐ bāshǒu qiān hóng hóng bái bái kāngnǎixīn  
gègè dōu bié zài xiōngqián kāngnǎixīn kāngnǎixīn shì hóng shì bái dōu bú yào zhǐqí  
mǔ·qīn hái jiànzài zhǐqí mǔ·qīn hái jiànzài

The Hearty Voices of May

People say "you were a foundling and bred in an orphanage." Nurses brought me up with the tenderest of care, but they were not my mother. This is Mother's Day; mothers and children walk hand in hand everywhere. Everyone has a carnation on their breast. Carnations! The carnations! Red or white. Love is not relevant to the color! I only pray my mother is doing well. I only pray my mother is doing well.

立志離家幾十載 到處流浪漂苦海 雖有志氣不適時 可是苦幹和忍耐  
五月第二禮拜天 人們個個帶笑臉 胸前鮮紅康乃馨 高興回家探母親  
康乃馨 康乃馨 是紅是白不敢愛 只祈母親稍等待 只祈母親稍等待

lìzhì líjiā jǐshízǎi dào chù liúlàng piāokǔhǎi suī yǒuzhìqì búshìshí kě·shì kǔgàn hé  
rěnnài wúyuè dì èr lǐbàitiān rénmen gègè dài xiàoliǎn xiōngqián xiānhóng kāngnǎixīn  
gāoxìng huíjiā tàn mǔ·qīn kāngnǎixīn kāngnǎixīn shì hóng shì bái bùgǎn ài zhǐqí  
mǔ·qīn shāo děngdài zhǐqí mǔ·qīn shāo děngdài

After I left home with a fixed aim, I experienced a few decades of roaming everywhere in bitterness. I had high ambitions but no opportunities, although I was hard-working and persevering. This is Mother's Day; everyone has a smile on their face and wears a red carnation on their breast, going home cheerfully to meet their mother. Carnations! The carnations! Love is not relevant to the color, red or white! I only pray my mother can wait for me a little longer. I only pray my mother can wait for me a little longer.

古今隱逸詩人の宗と絶賛された陶淵明が本心から隠遁を望んでいたかどうかは本章の始め



「望郷」で検討した。一家を挙げて国都南京に移住する友人に贈った「與殷晋安別」(48歳)で、「西風が吹き上がり、雲が東へ悠々と去って行く...何時か此処を通り過ぎたら、私を思い出して訪ねて下さい」と取り残される寂しさを詠み、「雜詩十二首：其五」(50歳頃)では残り少ない人生を思い青年時代の客気をさらっと詠じているが、53歳の時北伐に出て後秦を破り長安を陥落させた劉裕の戦勝祝いに行く友人には「人は離れ、運に恵まれない」(贈羊長史)と、謎のような淋しさを伝えている。「怨詩楚調示龐主簿鄧治中」(54歳)は、青年時代からの不幸を並べ立て、終句では州府の役人に「判ってくれるのは、貴方がただけ」と、此の取り乱したとしか言いようもないような愚痴を並べ立てた表現の断層には、53~54歳の間に一身上に生じた重大な事情が隠されていたに違いない。

永初元年(420)56歳、青年時代に軍閥劉牢之の参軍(幕僚)同僚であった無学粗野の劉裕が帝位を篡奪し、自らも武帝と称し、国号を宋とした。56,7歳頃の「擬古九首：其八」は、若い日の壮大な客気と其の後の挫折の嘆きとを告白している。57歳の作「述酒」は難解で英訳が難しく、東晋最後の恭帝の毒殺に失敗し兵に扼殺させ、帝位の篡奪を確かなものとした劉裕に対する憤りと政治の局外者としての無念さを詠んだものであった。

隠遁詩人と謂われてもなお、燃えるような政治への関心を抱き続けた淵明の生き方は、同様に士族の意地に掛けて仕官出世を激しく望みながら、俳諧師として土農工商の枠外の遊民に置かれ、隠遁者、隠士といわれても、後年その挫折の淋しさを書き残した松尾芭蕉を思い出させる。

俳諧師として生きることの厳しさ、時に惨めさについて、江戸で生活していた44歳の小林一茶は率直に、「遊民遊民とかしこき人に叱られても、今更せんすべなく」と前書きして、「又とし娑婆塞(しゃばふさぎ)\*ぞよ艸(くさ)の家」(文化句帖)と自嘲の句を残している<sup>139</sup>。俳句の点料(添削料)で生活していた一茶がお年賀に行き、正月酒に酔った商家の旦那に見下されたものであろう。「かしこき人」と嘲笑しても彼の口惜しさがにじみ、「遊民」と謂う言葉からは窺い知れない語感を認識させる。\*役に立たぬ穀潰(ごくつぶ)し。

芭蕉は、天正伊賀の乱で織田信長に徹底的に殺戮壊滅され、僅かに生き残った者が伊賀上野に土着した松尾一党の子孫であった。彼は落ちぶれた士族の家の再興を願っていたようである。「つらつら年月の移りこし拙き身の科を思ふに、ある時は仕官懸命の地をうらやみ、一たびは佛籬祖室の扉に入らむとせしも、たよりなき風雲に身をせめ...先づたのむ椎の木もあり夏木立はせを」(幻住庵の記)<sup>140</sup>と、お上の役人になり封禄を受ける境遇を得たかったと告白している。また、「あすは檜の木とかや、谷の老木(おいき)のいへる事あり。きのふは夢と過(すぎ)て、あすはいまだ来らず。ただ生前一樽(そん)のたのしみの外に、あすはあすはといひくらし、終(つひ)に賢者のそしりをうけぬ。さびしさや華のあたりのあすならふはせを」(笈日記)<sup>141</sup>と、挫折した希望を自嘲し、死後の名声より生前の一樽の酒の方がいいと思いつつも、明日は明日にはと末練を持ち続け、「あすなろ」と同じであった、とも告

白している。芭蕉は淵明と同じく貧乏の一生を過ごしたが、淵明は貴族、士族であった家門として暫らくは古川に水絶えぬ余裕があった。

芭蕉は元禄7年9月27日大阪の句座の後、恐らく食中毒であろうが、激しい下痢が始まり、10月5日花屋の裏座敷に移り、10日危篤状態になって伊賀上野の長兄半左衛門に自ら故郷を恋うる思いに満ちた最後の手紙を書いて、12日死。芭蕉の墓は志賀義仲寺の他、故郷上野に遺髪を納めた故郷塚が建てられている。

芭蕉は其の死後に、次第に忘れられて行った。彼が再び注目されるのは、約九十年を経て芭蕉に心酔した与謝蕪村による蕉風再興運動から今日に至るのである。これは、淵明の死後百年を経て、彼に心酔した梁の昭明太子蕭統が、彼の詩文を集め「陶淵明集」を編集してから評価が定まって来たのと軌を一にしている。

淵明・杜甫を敬愛し、しばしば作句の参考ともした芭蕉と淵明とを比較することは、淵明を理解する上で役立つものと考えが、深入りは避けなければなるまい。

## 第二章 酒

### 帰農

元興二年(403)、淵明39歳の作「癸卯歲始春懷古田舍二首」は、詩経、論語、更に莊子からの引用と、難解で遠回しな表現が多く、英訳が難しい。「其一」では「朝早く車に畑道具を積んで家を出ると....小鳥の囀(さえず)りも、新たに回り来た春を歡んでいるし、微風が吹いて浮き浮きした気分である....(英訳略)」と農作業の楽しさを歌い、前述の「其二」では「日入りて相与(あいとも)に帰り....歌を口ずさみながら柴の戸を閉め、まずは私も百姓暮らしが地についたようだ」と妻への愛を表現できない風潮の仲で、妻と共に農作業する楽しみを歌って、彼女への感謝と愛とを伝えたものと思われる。

同年の冬十一月、亡母の服喪のため夫婦の同居は許されず、十六歳年下の従弟敬遠と起居を共にし、下記の詩を詠んでいる。家族とは別に小屋を建てて生活したのであろう。

癸卯歲十二月中

To My Cousin Jing-yuan

作與従弟敬遠

寢迹衡門下	Living quietly in my humble abode,
邈與世相絶	I have remained aloof from social conventions.
顧盼莫誰知	I look around but know no one,
荆扉晝常閉	And even at midday is my thorny gate closed.
淒淒歲暮風	The winds in late autumn blow heavily,
翳翳經日雪	Snowy days pass incessantly and the sky is dark.

傾耳無希聲  
 在目皓已潔  
 勁氣侵襟袖  
 簞瓢謝屢設  
 蕭索空宇中  
 了無一可悅

I strain to catch the slightest sound,  
 And the pure white scene dazzles my eyes.  
 The nipping air slips into my collar and sleeves;  
 Often I am not able to fix even the coarsest of foods.  
 The deserted room is truly dreary,  
 There is nothing to relieve my solitude.

歷覽千載書  
 時時見遺烈  
 高操非所攀  
 謬得固窮節  
 平津苟不由  
 棲遲詎為拙  
 寄意一言外  
 茲契誰能別

When I look over my ancient books.  
 The many achievements of my forefathers are revived.  
 Though their incorruptibility is too hard to match,  
 I wish to stand firm in any poverty.  
 Since I dare not go on the road again,  
 Why should I fear a reclusive life?  
 Here, I tell you of my fidelity to my poverty,  
 Who else can share this belief of mine?

此の「謬得固窮節」,「棲遲詎為拙」の表現は微妙である。当時の慣習による服喪生活で、本来彼の心から出たのではない。躬耕を爽やかに受け入れて居るが、実際には、隠遁生活を推し量った詩と云えよう。本格的な帰農は更に後になる。翌年冬に劉敬宣の参軍になり、更に次の年に彭澤の令になって、其の辞任後に官吏の生活に訣別したのである。

上述の詩篇や其の後(406)の「歸園田居」(42歳)等は、淵明を田園詩人、隠士としての評価を高くしたものであろう。「歸園田居五首」は、「其一」で「羈鳥戀舊林...守拙歸園田：籠の鳥がもと棲んでいた林を恋うるように...私も故郷が懐かしく...世渡り下手な性格の儘に田園に帰って来た(英訳略)」と歌い、「其五」では、農民の生活に積極的に融け込もうとしている。そこでは、「勸農」のような農民に教示する態度は消え、人々も其の後の「飲酒：其十四」に見る狎れ狎れしさは無く、禮儀を失ってはいない。

歸園田居五首

Back to the Pastoral Life: Five Poems

其 三

No.3

種豆南山下  
 草盛豆苗稀  
 晨興理荒穢  
 帶月荷鋤歸  
 道狹草木長  
 夕露沾我衣

At the foot of Mount Lushan I sow my beans,  
 The seedlings are lost in the growth of weeds.  
 I rise early to weed the fields,  
 And trudge home, hoe on shoulder, in the moon light.  
 The paths are narrow, the plants grow thick and tall;  
 The evening dew wets my clothes.

衣沾不足惜 I do not care if my clothes get wet with dew,  
但使願無違 I only hope the seedlings will not fail to grow.

此の詩を詠むと、芭蕉の「陸奥に下らんとして下野の国まで旅立ける那須の羽黒といふ所に桃翠\*何がし住みけるをたづねて深き野を分け入るほど道もまがふばかり草ふかければ 秣(まぐさ) 負ふ人を枝折(しをり)の夏野かな」と云う句の情景が目には浮かぶ。見渡す限り丈の高い草が生え茂って道も明らかでない夏の野原で、幸い向こうに秣を一杯に背負って草を掻き分けて行く人が見えるから、あの人を道しるべに見失わないように後について行きましょう、と云うのである。芭蕉も愛誦した淵明の詩の、此の一節を思い浮かべていたのかも知れない。 \* (鹿子畑豊明。黒羽藩家老浄法寺図書館の弟)

其 五

No.5

悵恨獨策還 With a disappointed heart I plod toward home using my cane,  
崎嶇歷榛曲 On the way, going over craggy hills wrapped in shrubbery.  
山澗清且淺 Clear and shallow streams flow in the ravines,  
可以吾足濯 Where I've been able to wash my muddy feet.  
漉我新熟酒 Now I strain the fresh home-brew,  
隻鷄招近曲 Cook a chicken and invite my neighbours to share it.  
日入室中闇 The sun sets and the room darkens,  
荊薪代明燭 Wild brambles are put on the fire for light.  
歡來苦夕短 How happy in our chat we are, but how brief is the night;  
已復至天旭 Dawn comes so soon.

「出来たての酒を漉し鶏一羽を潰して、近所の人々と酒盛りをした。話が弾んで夜が短いのが恨めしく、はや夜が明ける」と、楽しく和やかに打ち解けた酒の席である。

義熙7年(411)、最も気心の合った従弟の敬遠が僅か31歳で死んだ。時に淵明は47歳。葬儀の際の彼の祭文は、「困窮を共にし、農耕を共にし、収穫を祝って河原に三晩も寝泊りして楽しく飲んだね(英訳略)」と死者との思い出を綴り、其の筆致は誠実で悲しみに満ちているが、迷いが無い。

飲酒二十首

「飲酒二十首」は40歳前後とも53歳頃の作とも云われる。内容的に透明さと迷いとを綯(な)い混ぜに、折々の酔後に書かれ、時には自らを励ましている。大半が53歳以後の作ではないか。此れらは、当時も其の後も、人々に愛誦されたのであった。

飲酒二十首

余閑居寡歡 兼比夜已長。偶有名酒 無夕不飲。顧影獨盡 忽焉復醉。既醉之後 輒題數句自

娛。紙墨遂多 辭無詮次。聊命故人書之 以為歡笑爾。

Twenty Poems on Drinking Wine

In the calmness of my life comforts are few. Furthermore, the nights are lately growing longer. Unexpectedly, I get some wine of high quality. Therefore, the night is not without drink. I toast my own shadow, and drink alone. After that, I write a few lines of verse for my own enjoyment. The inked pages accumulate without any order. I ask an old friend to rewrite them for a laugh.

其 五

No.5

結蘆在人境	In the village I built my hermitage,
而無車馬喧	Without hearing the sound of wheels and hoofs.
問君何能爾	But, do you ask me why?
心遠地自偏	A heart far from the land must needs create a refuge.
採菊東籬下	Picking chrysanthemums beside the eastern hedge,
悠然見南山	I view South Mountain in a leisurely manner.
山氣日夕佳	The mountain looks best in the setting sun,
飛鳥相與還	With birds flying home together.
此中有真意	In nature we find the truth of life;
欲辨已忘言	I wish to tell you how, but have lost the words.

蓄財の為に裏門から彭澤縣令に就任したが、名目的な俸禄の低さと実際には役得賄賂に頼る醜悪さ、門閥が総ての、官吏の生活への嫌悪から地位を捨てて隠棲した時の回想で、そうした媚びへつらいや駆引の世界を離れた心の安らぎが伝わって来る。

其 七

No.7

秋菊有佳色	In autumn, the chrysanthemums are colorful,
裒露綴其英	I pick off fresh petals full of dew;
汎此忘憂物	Setting afloat a thing to forget my gloom,
遠我遺世情	I feel myself far from the world.
一觴雖獨進	I enjoy sipping my wine all alone,
杯盡壺自傾	And pour myself some wine into the empty cup.
日入羣動息	The sun sets and everything ceases to stir,
歸鳥趨林鳴	But the chattering birds flying home to the woods.
嘯傲東軒下	Under the eastern eaves I sing with refreshed feelings,

聊復得此生      Regaining a little of life's enjoyment.

菊の花弁を浮かべて酒を飲み、志に反し放逐され、ついには汨羅江に身を投げて死んだ屈原の賦の中の「餐秋菊之落英」にあやかっただけであらうか<sup>10)</sup>。

其 八

No.8

青松在東園      A green pine grows in my eastern garden,  
衆草没其姿      Overrun by weeds, hiding its shape.  
凝霜殄異類      A frost eradicates all other plants,  
卓然見高枝      And then, its lofty top emerges.  
連林人不覺      Among other trees, people do not notice,  
獨樹衆乃奇      But when it stands alone, people stare in wonder.  
提壺挂寒柯      I take a pot of brew and hang it on a cold branch,  
遠望時復為      To enjoy it from afar on occasion.  
吾生夢幻間      My life is like a dream;  
何事繼塵羈      Why should I be constrained by this world?

自分を孤高の青松に擬えて、塵羈（じんき）、塵まみれの絆（役人の世界）に対する嫌悪を述べている。妻の死後の「後悔の詩」か。雑詩十二首：其十（次篇）と近い時期の作であろう。次の其十も、どうして役人などになったのかと自問自答し、後悔を記している。

其 十

No.10

在昔曾遠遊      Many years ago I travelled afar,  
直至東海隅      Straight toward the shores of the Eastern Sea.  
道路迥且長      The road was truly long;  
風波阻中塗      And the winds raged and blocked my way.  
此行誰使然      Why did I go on such a distressing journey?  
似為飢所驅      Because I was stung by hunger.  
傾身營一飽      I realized that if I had worked hard to satisfy my appetite,  
少許便有餘      I would have had enough to eat.  
恐此非名計      I feared that this kind of effort was unworthy of me,  
息駕歸閑居      So, I stopped and turned homeward.

劉敬宣の幕僚として劉裕の許に使いした時の回想である。淵明を尊敬し続けた山上憶良に此れと詩想の相通ずる一首がある。ひさかたの天道（あまち）は遠しなおなおに家に帰りて業（なり）を為（し）まさに（万葉集801）

其十四

No.14

故人賞我趣	My way of living is much to my friends' fancy,
挈壺相與至	They visit me together with pots of brew.
班荆坐松下	We sit on fallen leaves under a pine;
數斟已復醉	A few cups of the brew make us all drunk.
父老雜亂言	The elders begin to slur their words,
觴酌失行次	And in exchanging the cups, they become disorderly.
不覺知有我	Without being aware, they lose control of themselves;
安知物為貴	How can they know the worldly values of things?
悠悠迷所留	While everyone is lost in wishing for fame and fortune,
酒中有深味	A cup of brew holds the deepest meaning.

近隣の人々が彼を訪ねての酒の席の乱れは、淵明が奇妙な行動を示し始めた53歳頃以降の事であろう。「歸園田居：其五」(42歳)の楽しく和やかな酒の席とは異質で、恐らく彼には妻の死の齎らした苦悩からの逃避の酒で、人々の彼への尊敬は消え失せた。

藤原氏の策謀で太宰帥に左遷された大伴旅人は、家門復興の望みも失せ、一坏(ひとつき)の濁酒以外に憂いを払う術もなかった。飲酒二十首には及ばないが、酒を讚(ほ)むる歌十三首(万葉集338-50)を残した。なかなか人とあらずば酒壺(さかつぼ)になりててしかも酒に染(し)みなむ(343) 價無き寶といふも一坏の濁れる酒にあにまさめやも(345)

止酒

陶淵明は、責子(子を責める)詩の中で「俺の子はどれもこれも出来が悪いなあ」と嘆きながらも、実際には慈愛に満ちた情を湛えて其の子らを眺めつゝ、酒を楽しんでいた。また、止酒(酒を止める)詩は、時には飲み過ぎて後悔することもあるが、「酒は止めたほうがよいだろうな」と、ふと考えることがあったのかもしれない。本心は「酒を止めるなどは、仙人でもない限り、とんでもないことだよ」と酒への愛着を詠んでいる。戯れ歌とも言うべき此の詩を作って妻や子と笑いさざめく幸せな彼が眼に浮かぶ。

止 酒

Abstaining

居止次城邑	Having given up living in a town,
逍遙自閑止	I stroll aimlessly and enjoy an easy life;
座止高蔭下	I always rest in the shade of a luxuriant tree,
歩止華門裏	And walk around within my own gates.
好味止園葵	There is nothing better than a relish of garden greens,
大懼止稚子	And nothing happier than playing with my little girl.

平生不止酒 All my life, I have never abstained from drinking;  
 止酒情無喜 To stop would make me feel no joy.  
 暮止不安寢 I couldn't sleep peacefully if I stop drinking in the evening,  
 晨止不能起 And, I may not have a pleasant awakening in the sober morning.

日日欲止之 For a long time I wanted to stop;  
 營衛止不理 Even if I had, my health would have suffered.  
 徒知止不樂 Stopping would be no fun, I thought,  
 未知止利己 Not knowing that it was good for me.  
 始覺止為善 But now, I recognize the benefit of abstaining;  
 今朝眞止矣 And from this morning, I drink no more.

從此一止去 I shall give it up once and for all,  
 將止扶桑浹 And shall live on the shores of the Eastern Fairy Isles;  
 清顏止宿容 Giving it up will rejuvenate this old face,  
 奚止千萬祀 Why not live for ten million years?

各行に「止」\*の字を配し作詩の技巧を弄(もてあそ)んだ此の言葉遊びは、英訳では表現できない。生真面目な淵明も若い時には、「止酒」や「責子」で余裕を持って遊んでいる。「閑情賦」に不謹慎だとめくじらを立てるのも大人げないのではないか。

\*止: to stop; to desist: to detain; to rest in; to stay: to prohibit; to end: to come to; to arrive at, to give up: still; calm; stagnant: only, etc.

種田山頭火は、昭和8年5月25日に、「酒について：うまい酒，酔う酒であらねばならない，にがい酒，酔はない酒であってはならない。」と，7月20日に「酒は目的意識的に飲んではならない。酔は自然発生的でなければならない。...飲むことは酔ふことの原因であるが，酔ふことが飲むことのものである。...悠然として山を観る，悠然として酒を味ふ，悠然として生死を明らめるのである一酒に関する覚書(一)」と日記に記している<sup>10)</sup>。彼は淵明の「飲酒二十首：其五」を念頭に置いていたのであろう。

#### 五柳先生伝

蕭統は「陶淵明伝」で「淵明...嘗(か)つて『五柳先生伝』を著し，もって自らに況(たと)う。時の人これを実録と謂えり」と述べている。彼は，「生まれつき酒が大好きだが，貧乏で常に飲めるわけではなく，これを知っている親戚や友人が酒を用意して招くと，やって来て飲み尽くし，酔っぱらって満足する(期在必酔)。そして未練がましくぐずぐずせず，さっさと帰って行った」と書いている。「酒を飲むことは酔っぱらう為」と書いたことは，彼が書い



た日付は判らないが、其の年代には既にアルコール中毒になっていたと言えよう。蕭統の「淵明伝」は、次のような挿話も記載している。「郡将嘗候之 值其釀熟 取頭上葛巾漉酒 漉畢還復著之：ある時、郡の武官が淵明を訪ねたら、丁度仕込んでいた濁酒が出来上がった処で、彼は自分が冠っていた葛布の頭巾をぬいで、酒を漉し、漉し終わったら、また其の頭巾を冠った」と云う。彼はアルコール含有量だけに関心を持ち、味、香りは問題にはしなかった。其の漉し布代わりの頭巾や彼の体臭などの異臭を考えれば、其の濁酒は現在の我々にはとても耐えられぬ異臭を有していたに違いない。

この自伝は、28歳頃とも、晩年の作とも言われている。詩人らしい誇張であろうが、「環堵蕭然 不蔽風日 短褐穿結 箠瓢堵空 晏如也：狭い家は、寒暑も満足に妨げず、着ている物はボロだらけ、しょっちゅう飲食物に不自由したが、平然としていた」という記述は、54歳以後に実際にあった状況を述べたものであろう。

#### 五柳先生伝并贊

先生不知何許人也 亦不詳其姓字 宅邊有五柳樹 因以爲號焉。 閒靜少言 不慕榮利。 好讀書 不求甚解 每有會意 便欣然忘食。 性嗜酒 家貧不能常得 親舊知其如此 或置酒而招之。造飲輒盡 期在必醉。 既醉而退 曾不吝情去留。 環堵蕭然 不蔽風日 短褐穿結 箠瓢屢空 晏如也。 常著文章自娛 頗示己志。 忘懷得失 以此自終。贊曰、黔婁之妻有言、不戚戚於貧賤 不汲汲於富貴。 極其言 茲若人之儔乎。 酣觴賦詩 以樂其志。無懷氏之民歟。 葛天氏之民歟。

#### Some Comments on the Prose of Mr. "Five-Willows"

No one can identify who this man is nor what his real name is. Because five willows grew near his hovel, Mr. "Five-willows" became his alias. He was quiet and soft-spoken and above riches and honour. He was very fond of reading but did not probe into the details of things. Whenever he found ideas that agreed with his views, he forgot his meals out of joy. He was awfully fond of drinking too, but was not always able to buy wine because he was very poor. His relatives and friends sometimes prepared wine and invited him to share some, because they knew his condition very well. He would empty every drop from the wine-jars before getting drunk. And then, he left without comment.

His cottage was very small and quiet, and the roof and walls kept out neither the wind in winter, nor the sun in summer. Even though his clothes were too small, patched and ragged, and his bottles of wine and dishes usually empty, he took such things in stride. He wrote for pleasure and expressed his inner-most thoughts. He did not care in the least about worldly profits or losses. In such manner, he lived and died alone.

It is said that the wife of old hermit, Chien-lou, once remarked that one should not be dispirited even though poor and humble, nor be greedy for wealth and honour. What she said might describe the life of a man like him. He drank heavily, wrote poems, and satisfied himself. Was he, indeed, the kind of man as those in former days?

帰去来兮辭の中で、故郷に帰れば、召使いが歓び迎え、子供らは待ち侘び、部屋に入ると樽一ぱいに酒が用意されていた、と記しているが、淵明は、家を整え酒を醸して待っていて呉れた妻翟（てき）氏については、此の自伝の中で全く触れていない。士大夫は経世の大志を述べるべきで、女性への愛、感謝などを詠むべきではないと云う当時の風潮に縛られたのであった。しかし、自伝中で黔婁（Chien-lou）の妻に言及しているのは、淵明自身が妻翟氏への感謝を述べずには居られなかったであろう。彼の詩賦の蔭にいる彼女を考慮せずして、彼の生き方を理解出来るとは考えがたい。

### 第三章 妻の死

#### 重陽節の濁酒

前述のように、淵明53-54歳の間に、詩の表現に断層が生じた。「会（さと）ること有りて作る、並びに序」（62歳）で、其の日の食べ物にも事欠く窮状を述べ、「斯濫豈収志 固窮夙所帰：小人のように窮して取り乱すのは私の執る処ではなく、いかに困窮しても節を曲げぬ精神こそ私が早くから覚悟して来た処である（英訳略）」と言っている。

何故、彼はこのような窮状を追い込まれたのであろうか。頑固さゆえに友に去られ、孤独になった老人の負け惜しみを張った侘しさを感じず。「人は離れ、運に恵まれない」（53歳）と友人に洩らし、「友人も無く、私の心は暗い」（飲酒第十六：省略）と嘆いた侘しさである。制作期日不明の「乞食」の詩で、「飢えに駆り立てられ、あてども無く食物を求め歩き、見ず知らずの家の主人に恵んで貰った。挙句に、酒を振舞われ、新しい知己を得た喜びを詩に詠んだ\*」（次篇）と述べている。読み続けるには、余りにも惨めな大詩人の晩年である。此れに類似した事例からも、晩年になるにつれ、かたくなな態度に困窮が加わり、また人格が崩壊して行く惨めさが感じられ、それらの裏に隠された事情、彼が抑制のため書けなかった事実がおぼろに浮かび上がる。\*：尋陽は溪族の多い土地柄で、彼は同族の誇りとして故郷の人々の間で知られていたのではないか<sup>10)</sup>。

義熙5年（409）、45歳の重陽の節句の詩は、其の時生じていた迷いも恐らくは妻翟氏の手作りの濁酒を飲んで安らぎを覚えて詠んだものであろう。

己酉歲九月九日	The "Double Nine" Festival
靡靡秋已夕	The autumn passes slowly and feebly,
淒淒風露交	The wind brushing over the fallen dew.
蔓草不復榮	The rambling grasses flourish no more;
園木空自凋	And the garden trees have lost their leaves.
清氣澄餘滓	The autumn winds refresh the air,
杳然天界高	The blue heavens extend to the heights.
哀蟬無留響	The droning and wailing of cicadas ceases,
叢雁鳴雲霄	But flocks of wild geese sound among the clouds.
萬化相尋繹	Everything changes in its turn;
人生豈不勞	How can we pass this world without hardships?
從古皆有沒	Everything, from earliest times, has been bound to die.
念之中心焦	Thinking of that, I cannot help but be troubled.
何以稱我情	How can I console my troubled heart?
濁酒且自陶	I shall enjoy myself by having some home-brew.
千載非所知	No one can know what will happen a thousand years hence,
聊以永今朝	This being the case, I shall enjoy eternity this morning.

確かに秋の夕暮に突如として人生の“はかなさ”に思い至ったが、妻の手作りの濁酒を味わって、落ち着きを見出した彼の安堵感が滲み出ている。これに比べ、其の後54歳の義熙14年(418)の重陽節に詠んだ詩では、言いようも無い惨めな気分になっていた。

九日閑居并序 余閑居 愛重九之名。秋菊盈園 而持醪靡由。空服九華 寄懷於言。

Some Short Prose on the "Double Nine" Festival and Pastoral Life

I have lived in the countryside and have come to love the "Double Nine" Festival. The gardens are a riot of chrysanthemums. And yet, I do not expect to get any brew. So, I have had the petals of blossoms and only ate them. I expressed my thoughts in these verses.

世短意常多	Life is short and there are too many afflictions in this world;
斯人樂久生	Thus, man always wishes to live to a great age.
日月依辰至	The time of the "double nine" festival returns every year,

舉俗愛其名 And people generally applaud this name.  
 露淒暄風息 Dew appears and warm winds cease to blow.  
 氣澈天象明 The air become pure and the sky clears.  
 往燕無遺影 Departing swallows take wing and leave no shadows behind.  
 來雁有餘聲 The wild geese return with their calls reverberating in the air.

酒能祛百慮 We learn that the goblet can remove a hundred solicitudes,  
 菊為制頹齡 And that chrysanthemums keep people from getting old.  
 如何蓬蘞士 What to do, a poor scholar in this dilapidated abode?  
 空視時運傾 Why do you sit idly by and watch time passing?  
 塵爵恥虛罍 I am ashamed of my dusty goblet and the empty wine-jar.  
 寒華徒自榮 The frosty chrysanthemums are in bloom for nothing.

斂襟獨閒謠 Adjusting my clothes I recite my verses alone,  
 緬焉起深情 Deep feelings arise in my heart.  
 棲遲固多娛 There are many joys in my quiet sojourn,  
 淹留豈無成 Staying here a long time, everything may get along somehow.

「私の大好きな重陽節が来た。菊の花は咲き乱れているが、肝心の濁酒は無い。菊の花を菊酒の代わりに食べた」と、更に「盃に埃が積もり、酒樽は空っぽなのが恥ずかしい」と寂しく嘆いている。帰去来兮辭の「故郷に帰り部屋に入ると樽一ぱいに酒が用意されていた」のとは大変な違いである。蕭統は「伝」に「嘗て九月九日酒無し。出でて宅辺の菊叢の中に坐し、之れを久しうして、満手に菊を把る。忽ち（王）弘の酒を送りて至るに値（あ）い、即（ただ）ちに便（すなわ）ち就きて酌み、酔うて帰る」と述べている。

この詩で淵明は、彼を支えてきた翟氏が濁酒を作って置かなかった事を述べている。彼女が亡くなって、もはや其の心遣いを為し得なくなったのを暗示する。義熙13年（53歳）、「人は離れ、運には恵まれない」と嘆いた時こそ、妻の死に至る病を、あるいは其の死を明らさまには書けない風潮の中で表現したのではないか。翟氏は後妻であり淵明より或る程度年若く、彼は妻が彼よりも早く死ぬとは全く考えていなかったに違いない。彼のショックは非常なものであったと想像できよう。前章で触れた大伴旅人が大宰府に在府中、妻を失った（728A.D.）。取り乱していたであろう旅人に代って、山上憶良が悼亡歌を捧げた。

家に行きかか吾がせむ枕づく妻屋さぶしく思ほゆべしも（万葉集795）

家に戻っても、私はどうしたらよいだらう。是からは（枕づく）二人の寝室が寂しいばかりになるのに、と。誠実な憶良の旅人の孤愁をいたわる共感が伝わってくる。旅人は天平二年（730）12月、長屋王謀殺を取り繕う藤原氏に呼び戻され、7か月後、67歳で没した。藤原氏に

とって恐れる必要もなく利用する価値もなくなった者の運命であったろうか。

義熙14年(54歳)、東晋王朝第一の門閥貴族王弘が刺史として江州に着任した。彼は自ら淵明を訪問したが、淵明は病気を理由に面会を拒絶した。王弘が事を荒立てること無く其の儘帰っただけに、折角来訪した地方長官を拒絶した淵明の非礼を世間是非難し、彼も本当に病気があったと弁解しなければならなかった。

此の非礼事件や同年上述の「九日閑居并序」、蕭統が「伝」に述べた王弘から贈られた酒に飛付くように飲んだと云うアルコール中毒者そのものの異常な行動は、彼の妻翟氏の死以外には説明できない。翟氏は誇り高い隠士として名の通った家系の出で、それだけに隠士の生活と其の志に深い理解を持っていた。蕭統が「伝」の中で彼女を称賛した所以である。其の彼女が生きていたら、地方長官が其の茅屋を訪問するという破格の礼に対し面会拒絶と云う非礼に同意するとは考えられない。更に、淵明が「乞食」に述べたような浅ましい行為をさせようか。彼女が居たら淵明を他人の門口に立たせる筈はない。

淵明53～54歳の間の或る日、其の翟氏は死んだ。晩年の彼の異常さは、頼りきっていた妻の死による虚脱から立直れなかった為としか考えられない。

#### 淵明と竹林の七賢の巨頭、阮籍

地方長官自らの訪問という破格の礼に、淵明が面会拒絶という非礼を取ってしまったのは、もしかすると、彼の妻の死の弔問にかこつけての王弘の訪問であったのかも知れない。更に、詐術欺瞞によって起こり同様の経過で晋に乗っ取られた魏王朝の末期に生きた竹林の七賢の巨頭阮籍(210-263)に、淵明が倣(なら)ったとも考えられる。阮籍の母が死に、時の宰相裴諧(はいかい)が弔問に訪れた時、喪主の阮籍は酔眼もうろうとし、ざんばら髪で胡座をかいたままであった。しかし、裴諧は伝統的な礼法通り弔問の礼をとり、丁重に悔やみを述べて去った。其れを聞いた人が裴諧を批判すると、彼は「阮籍は方外の士であるから礼典を崇めず、我は俗中の士であり自分の社会のしきたりに従うのだ」と言い、世人は両方を褒めたといわれる。竹林に逃避していた阮籍が時の宰相に対し酒にかこつけて敢えて奇矯な行為をしたことと、其れと知りつつ礼法を守った裴諧の度量とを理解したものであろう。阮籍は華人であり富裕な家門の出身で、隠遁者でなく後に晋王朝を開く有力門閥司馬氏の幕僚でもあって、世人の見る目が初めから違っていたとも言えよう。隠士といわれても夷民族で貧乏士人の淵明が同様の行為をした場合、評価に差を生じて仕方あるまい。他方、王弘にも宰相裴諧に倣う考えがあったのかも知れない。王弘は恭帝から劉裕への帝位禪譲の仕掛人として余り評判の良くない人物であったが、淵明に対しては数々の好意的なエピソードを残し、淵明もまた其の後は王弘に礼を尽くしている。

吉川幸次郎教授は、阮籍の「詠懐」八十二首は、淵明の「飲酒」二十首其の他の諸連作のきっかけとも見得ると述べている<sup>19)</sup>。淵明が常々阮籍を念頭に置いていたのは間違いない。阮籍は、常識を越えた大酒飲みとして知られていたが、其の詩作において実際には飲むを欲せざ

る酒について二句を残すのみであると云う。彼の酒は結局時世を欺く仮面、仮装ではなかったか。酒を好み、時には酒に溺れた淵明との大きな差異の一つである。

同教授は阮籍を敬愛し、1955年に Boston の隠士 Ezra Pound を St.Elizabeth Hospital に訪ねた時、裸で体操をする老人を見出した。教授は会見記に老詩人の印象を「阮籍の如き有り」と評した<sup>4-b)</sup>。同教授の「阮籍伝」が一首だけ挙げた「詠懐：其一」は、蕭統が『文選』に選んだ十七首の其一でもあり、味わい深い名詩である<sup>20)</sup>。英訳を試みた。

詠懐：其一 阮籍	Expressing My Thoughts: No.1	Ruan Ji (210-263)
夜中不能寐	It's the middle of the night and I can not sleep.	
起坐彈鳴琴	I get up to sit and play my lute.	
薄帷鑒明月	The moonlight shines through the thin curtain,	
清風吹我襟	A refreshing breeze opens the lapels of my robe.	
孤鴻號外野	A lonely goose trumpets over the fields;	
翔鳥鳴北林	Fluttering birds chirp in the north woods.	
徘徊將何見	Pacing back and forth, should I go and look?	
憂思獨傷心	I feel depressed being alone and with a heavy heart.	

宋文帝の元嘉3年(426)、王弘が揚州刺史となって去り、後任として武将檀道濟が江州刺史となった。其の頃、淵明の貧と病は益々厳しく、瘦せ衰えて寝た切りであった。道濟は有名な隠士淵明への好奇心から自ら見舞いに出掛けたのであろう。恐らく酒気の切れた淵明は鋭敏になった自尊心を剥き出しにしていた、と思われる。道濟が見舞品として大栗や肉を贈った時、彼は手を振って強く其等を拒絶した。権力者の傲りを、彼を見下す侮蔑を感じ、自分が江南人であることを改めて強く自覚してのことではなかったか。

此の淵明と道濟との挿話は、「奥の細道」の旅を終え大垣に着いた芭蕉と藩の重役戸田如水との面会を思い出させる。如水は千二百石取りの次席家老であった。到着以来度々招かれても、芭蕉は病氣と偽って断っていたが、出発を前に同藩の門人達の立場を考え、止むなく招きに応じた。しかし、如水宅で案内されたのは表座敷ではなく下屋(しもや)であった。芭蕉が当時どれほど名の知られた俳諧師であっても、その身分は士農工商の枠外におかれた遊民に過ぎない。遊民遊民と見下された悔しさを詠んだ俳諧師一茶の自嘲については先に述べた通りである。如水の招きも、有名な遊民芭蕉への軽侮と好奇心とからであったろう。夕飯の招きには先約があるという口実で辞去した。翌日、如水は芭蕉に南蛮酒と紙子とを届けてきた<sup>20)</sup>。権力者としての自らの思い上りを恥じたものか。武将檀道濟が隠士淵明に拒絶された時の心理を窺わせる挿話ではある。

若いうちから、もともと読書人の淵明は蕃夷・賤民と侮蔑されてもじっと耐えて平静を装わ

なければならなかった。そして、彼の性格的な弱さから次第に酒に頼って心の平安を求め、更に隠遁の道を選んだのであろう。

他方、日本人には、往々にして此の対極の行き方を選ぶ者が少なくない。長部日出雄氏の「まだ見ぬ故郷」<sup>22)</sup>は、信長・秀吉・家康、と三人の天下人の世に切支丹信仰を貫き通して追放され、マニラで死んだ戦国武将高山右近の清潔にして壮絶な生涯を描いている。平成の古典として読み継がれるであろう。本書のもう一つの特色は、疎外・侮辱に耐えられなくなって、恨みを爆発させた人の凄惨な滅びをも哀感を籠めて書いている。氏素性の明らかでない低い出自にもかかわらず才覚・力量ゆえに織田信長に抜擢され目覚ましい昇進を遂げた明智光秀が、或る日其の出自ゆえに信長の嫌悪の対象におとしめられ、じっと我慢するのをよいことに、疎外・侮蔑を繰り返されて、あまつさえ満座の中で足蹴にされるという侮辱を加えられた。名誉を重んずる武将として光秀は其の時に機会があれば必ず信長を殺してやると心に誓った筈である。彼は中国攻めに出陣するため本能寺に僅かな手勢と共に滞在していた信長の不意を襲い、焼殺した。長い間耐えに耐えた「恨み」の爆発した天下取りは全ての人の知る処であり、其れ故にまた三日天下で終わり、一族郎党を道連れに滅びた。しかし、光秀は土民に殺される瞬間に「一つだけは遣り遂げた。あの男にはもはや人を侮辱する機会二度とないのだ」という満足感があつたに違いない。

疎外・侮蔑は人を傷つけるだけである。是は現在日本人に突き付けられている問題そのものでもあることを知るべきであろう。かつて東洋の小国として、今経済大国として、かつての裏返しとしての形だけの紳士淑女の心はそのまた裏返しの儘に成り勝ちであろう。國讐猶可恕私怨最難消(桃花扇、清戯曲)「國の讐は猶ゆるすべし 私の怨は最も消しがたし」<sup>23)</sup>と。歴史を知らずしては、其の示す恐ろしさにも気付くことは無い。金欲で泥まみれの、また他国の代理人としか考えられぬ政治屋に滅びの歴史を見る思いを禁じ得ない。

元嘉4年(427)11月、淵明63歳、悪性マラリヤで没した。顔延之は「陶微士誄」を書き、靖節と諡(おくりな)した。

## おわりに

長い間、妻に全面的に依存してきた夫が老年になって、全く考えても見なかった妻の死に直面した時、急速に自分を見失う事は現代日本における高齢化社会が抱える身近な、しかも、重大な老人問題の一つにもなっている。蕃夷として疎外・侮蔑され、酒に逃避し溺れていった老人淵明にとって妻の死は、彼に彼女の深い愛、思い遣り、励ましを痛感せしめるものとなったであろう。其れゆえにこそ、妻を恋うる懐いが深まっていったに違いない。妻の死によって心の支えがなくなり、其の寂しさ、苦しさから酒にますます溺れていった淵明は、近隣の老人達にも軽んぜられるようになった。現代風に言えば、アルコール依存症になってしまった彼の行

動は軽侮を誘うものであったと思われる。千六百年の歳月の隔たりを超えて、此の偉大な詩人の晩年に其の老残の影を見るのは本当に辛い。

## 文 献

- 1) 櫻井, 大木, Kelley, Alexander: 「陶淵明考」(其一) 東と西: 漢詩の英訳 (3)。本誌, 5, 45-71, 1991。
- 2) 櫻井, 大木, Alexander, 呂: 「漢武帝の愛」東と西: 漢詩の英訳 (2)。本誌, 4, 25-48, 1990。
- 3) 司馬遷: 報任少卿書。(a) 漢書(司馬遷伝), 中国古典シリーズ3。平凡社, 1973。(b) 神塚淑子訳: 文選下。p.80。中国の古典 24。学習研究社, 1985。
- 4) 吉川幸次郎: 西洋の中の東洋。a) p.27, b) p.45。文藝春秋新社, 1955。
- 5) 久保正彰訳: トウキユディアス「戦史」。村川堅太郎編; 世界の名著5。中央公論社, 1970。
- 6) 小林一郎: 詩経上。経書大講6。平凡社, 1938。
- 7) 朱熹: 詩経集伝序。再刻頭書詩経集註(再版)。浪華書肆秋田屋太右エ門, 慶応三年。
- 8) 小林一郎: 易経繫辞伝。経書大講8。平凡社, 1939。
- 9) 蕭統: 陶淵明伝。10-a), pp.12-26。
- 10) 松枝茂夫, 和田武司: 陶淵明全集。a) 上巻, b) 下巻。岩波文庫。1990。
- 11) 山本和義: 元稹伝(旧唐書卷一一六)。小川環樹編; 唐代の詩人-その伝記。pp.435-454。大修館書店, 1975。
- 12) 元稹: 全唐詩, 卷404。台北, 宏業書局, 1982。
- 13) 丸山一彦校注: 新訂一茶俳句集。岩波文庫。1990。
- 14) 北原義太郎編: 幻住庵の記。大芭蕉全集 第六巻, 俳文編。大観堂書店, 1935。
- 15) 阿部正美: 芭蕉伝記考説(再版)。pp.386-387。明治書院, 1981。
- 16) 鈴木虎雄訳注: 陶淵明詩解。東洋文庫529。平凡社, 1991。
- 17) 種田山頭火: ふるさとの山 其中日記(二)。山頭火の本5。春陽堂書店, 1980。
- 18) 李長之著, 松枝茂夫, 和田武司訳: 陶淵明。筑摩叢書 72。筑摩書房, 1966。
- 19) 吉川幸次郎: 阮籍の詠懐詩について。吉川幸次郎; 中国詩史(上)。pp.209-275。筑摩叢書 94, 1967。
- 20) 吉川幸次郎: 阮籍伝。全。pp.195-208。
- 21) 井本農一: 芭蕉入門。pp.160-161。講談社, 1977。
- 22) 長部日出雄: まだ見ぬ故郷(上, 下)。毎日新聞社, 1991。
- 23) 安岡正篤: 新編漢詩読本(覆刻版)。p.61。二松学舎大学出版部, 1981。



## 別 章

### 漢詩英訳の検討

1 : 5 などの数字は、それぞれ節、章を示す。したがって、1 : 5 は該当の詩の第1節の5行目を意味する。

庚子歳五月中従都還阻風於規林 二首：

其 一

1 : 5 「鼓棹路崎曲」 「路崎曲」の曲には、winding, meandering などの形容詞を考えるが、これらの語は river, road などとは共起しても bank には使えないようである。ここでは意識して、irregular shoreline とした。

1 : 6 「指景限西隅」 「景限西隅」を The sun sinks below the horizon. と訳したが、the horizon の前置詞は、注意を要する。The sun sets (sinks) in the west. からの類推で、つい in the horizon としたくなるが、horizon は線であるから、共起する前置詞は、above, below, on などである。

2 : 2 「戢棹守窮湖」 「戢棹」は、かじを納めて漕ぐのを止めることであるから、意識して drop oars とした。この表現のほかに櫓を水平に上げたまま一時的に休む意味で、rest on one's oars があるが、簡潔な方を選んだ。「窮湖」は a (sheltered) cove が一番近い訳語と考えられる。なお、湖でなく海であれば cove のかわりに lagoon がある。

其 二

3 : 1 「静念園林好」 念を contemplating my gardens and groves のように contemplate を使うと、looking quietly and thoughtfully at my gardens and groves の意味になり、本詩の意味からずれてしまう。

癸卯歳十二月中作與従弟敬遠

3 : 6 「棲遲詎為拙」の拙は、clumsy を思い浮かべるが、英語の clumsy は、ものの外見や動きについて叙述する語であって精神的な事柄には使用しないので、ここでは避けた。

歸園田居五首

其 三

1 : 2 「草盛豆苗稀」原詩の語順を踏まえれば、The growth of weeds loses the seedlings. となるであろうが、状態を述べているので語順を交えて受け身形にした。

其 五

1 : 2 「崎嶇歷榛曲」 「榛曲」を wrapped in shrubbery と訳したが、この wrapped は enclosed completely の意味で、Webster's Third International には、〈the bluffs...wrapped in mist〉 〈the store was wrapped in flames〉 などの例があげられている。

五柳先生伝并贊

2 : 4 「箠瓢屢空 晏如也」 「晏如也」落ち着いて平然としている状態は、unaffected, unruffled, unperturbed, self-possessed, cool and collected などいろいろな表現がある。ここでは一時的な心の落ち着きを言っているのではなく日々安らかな心をさしているのだから、馬が障害物を常にペースを崩さず飛び越えることから生まれた慣用句 take...in (one's) stride を利用した。

平成4年1月29日受理